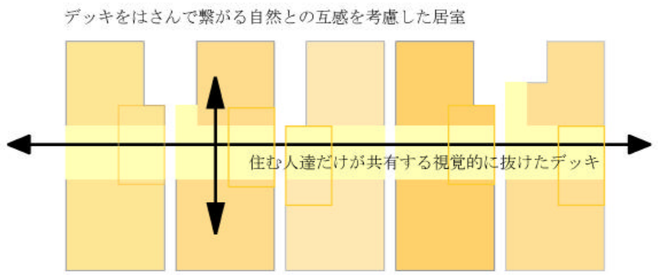
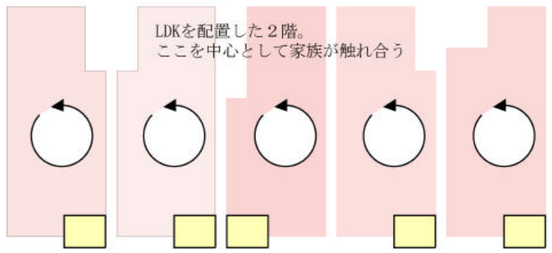
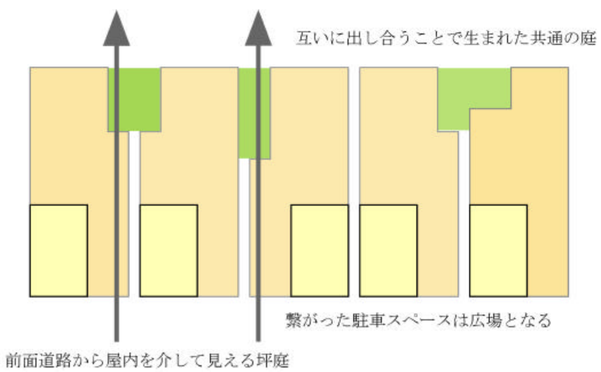
# 互京都感

## 自然や生活を互いに感じ合う建売り町家。




「互感」という言葉は、互換＋五感から生まれた。
　この言葉は、互いに存在を感じ合い、同じものを共有するという人と人との関係、そして自分の体を精一杯使いながら自然の恵みを感じることである。そして何より、その互感の生まれる場所で育んだ記憶は建物に投影され、隣人との関係が気薄になりつつある生活の中でも他者を忘れることはなくなる。隣人との関係の希薄さは、建築物外部に共有空間と名付けられたものを設けることによって解決されえない。ではどうすれば建築という箱から、家族や隣人との関わりが自然に生まれるのか。

　今回の設計では、家族・隣家・地域の三方軸への互感を考えた。
家族との関係性は、２階に一体型のLDKを設け３階の寝室へは常にLDKを通ってアプローチし、皆がLDKを中心に生活するように提案した。「おはよう」「いってきます」「今日ね、面白いことがあってねー・・」という当たり前の会話が当たり前に生じるようにと。

　隣家との繋がりは、１つに互いの空間をあずけ合い、自分だけでは持ち得なかった大きな空間を共有することを提案する。この中で視覚的な繋がりも生じ、借景として隣の庭を取り込んだり、逆に隣人に景色を提供する。

　また坪庭によって削られたヴォイドや、５棟の連続性を内部から表現した３階テラスは、住人しか知り得ない彼らのためだけの空間である。そこでは光や熱、風などを互感することができ、互いの生活や趣味を感じることで、安心感や親近感が得られ交流が深まってゆくだろう。
　地域に対しては、玄関から駐車場、道路を一体と考え、それぞれ少しずつ開放することで地域とのつながりを途切れさせないようにする。それらの空間に居住者自らが花や彫刻を飾り、建物のみで町並みを形成するのではなく、地域に向けて生活を感じさせる。

新たなる町家の関係性を創造するために。